

2026年3月3日

報道関係各位

株式会社東京ドーム

世界最高レベルのプレー環境を維持するために 東京ドームの人工芝を7年ぶりに刷新

～競技性能の向上と多目的利用への適応を追求した最新モデルを採用～

株式会社東京ドーム(所在地:東京都文京区、代表取締役社長 COO:長岡 勤)は、2026年プロ野球シーズンおよび各種イベントの開催に向け、東京ドーム内の人工芝を約7年ぶりに全面刷新しました。

東京ドームでは、常に最良のコンディションを維持するため、定期的な人工芝の張替えを実施しております。2019年以來の更新となる今回は、アスリートの足元を支える「安定性」と、多種多様なイベントに対応できる「耐久性」を一段と高めた最新の人工芝を採用しました。

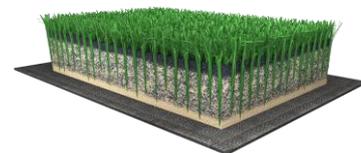
今回の刷新により、これまで以上に質の高いスポーツ・エンターテインメント空間の提供を目指してまいります。



■今回の人工芝刷新のポイント

1. 東京ドーム独自の設計による「最新型スリットフィルムヤーン」の採用

今回採用した人工芝(フィールドターフ社製)は、東京ドームの環境に合わせて独自に設計された最新モデルです。フィールドターフ独自のハニカム形状を持つ「スリットフィルムヤーン」により、低摩擦性を維持しつつ、優れた復元力と安定したプレー性能を実現しました。



2. 3層構造の充填材とヤーン増量による「フィールドの安定性」

人工芝の基盤となる充填材には、ラバーチップと珪砂を組み合わせた「3層構造」を継続して採用。さらにヤーン(芝葉)の本数を増量することで、充填材の包含能力を高め、飛散を抑制しています。これにより、激しいプレーにおける足元の安定感が向上するとともに、長期間の使用に耐えうる強固なフィールドを構築しています。

3. 多目的なイベント運用への高い適応性

東京ドームは野球のみならず、コンサートをはじめ多種多様なイベントが開催される施設です。新しい人工芝は、設営・撤収などの頻繁な転換作業にも柔軟に対応できる耐久性を備えており、あらゆる興行において常に高品質な床面コンディションを提供します。

4. 技術改良による環境負荷の低減

最新の製造プロセスの導入により、PFAS(有機フッ素化合物)を意図的に使用しない環境配慮型人工芝を採用しました。国内で規制対象となっているPFOS・PFOA・PFHxSは含有しておりません。

また、ヤーンの光の反射を抑制する設計により、視認性の高いフィールド環境を実現しています。

■新人工芝の概要

項目	内容
製品名	フィールドターフ(FieldTurf)FTHD Eco-T
構造	スリットフィルムヤーン + 3層構造充填材
主な特徴	低摩擦性、高耐久性、環境負荷低減
製造	フィールドターフ社(カナダ)
施工	奥アンツーカ株式会社
敷設箇所	グラウンド全面(約13,000㎡)
使用開始日 (野球)	2026年3月4日(水)

■(参考)東京ドームにおける人工芝更新の履歴

東京ドームでは、1988年の開場以来、常に最新の人工芝技術を導入してきました。2002年からは天然芝により近いロングパイル人工芝のパイオニアであるフィールドターフ社製の製品を採用し、今回で同社製として5代目の更新となります。

2002年：フィールドターフ社製を初導入

2007年：2代目更新

2014年：3代目更新

2019年：4代目更新

2026年：最新モデルへの刷新(今回)

※2002年以前は巻き取り式の人工芝となります。